

Nara Women's University

栽培作物からみた新疆における農業の変容-昌吉回族
自治区シムサル県を事例に-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古澤,文, 吉田,容子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/978

栽培作物からみた新疆における農業の変容
— 昌吉回族自治州ジムサル県を事例として —
古澤 文 (奈良女子大学地域環境学 博士前期課程)
吉田 容子 (奈良女子大学)

はじめに

1949年の中華人民共和国の成立以後、新疆における農業の変化は非常に大きい。灌漑水利施設の建設、農業機械の導入、化学肥料の投入、新しい品種の育成、合理的作期計画などにより、単位面積あたりの収穫量が上がり、食糧生産量は増加し、これまでの長期的食糧不足が解消する方向へと向かい(劉・吉野:1997)、新疆は自給自足から純移出地域となった(カマリディン:2003)。そして近年においては、栽培する作物が変化してきていることがわかる。新疆統計年鑑 2006によると1978年までは、小麦、トウモロコシなどの穀物の生産量、播種面積ともにトップだったのが、時代が下るにつれて播種面積は徐々に縮小し、変わって綿花栽培が増加し始める(図1、2)。しかし生産量の面からみると穀物は、年による変動はあるものの、ほぼ横ばいである。それに対して野菜、アルファルファ、果物などの生産量が伸びており、特に野菜に関しては飛躍的な伸びを示していることがわかる(図1、2)。

このような変化は2000年からはじまった西部大開発¹も関係があるだろう。西部大開発は東部沿岸地域との経済的格差を是正すべく、内陸部の発展を目的としたものである。インフラストラクチャーの整備、地下資源開発、観光開発、農業、工業の発展などそれぞれの地域ごとに西部大開発構想が作成されている。「新疆“十五”計画産業発展設想」によると新疆の農業に関しては、まず穀物の安定した生産をうたい、その基礎の上に綿花栽培、畜産品、林業、果樹等の園芸栽培があるべきとしている。そして特に、現在中国一の生産量を誇る綿花や、また、トマト、ペニバナ、クコに代表される「紅色栽培」とよばれる作物に力を入れ、栽培面積の増加を掲げている。トマトに関してはその加工品であるケチャップが近年の新疆外へ出荷される品目の中では半数以上を占めており(図3)、綿花と並んで、新疆における重要な商品作物となってきた。

市場経済の発展によってそれまでの自給的な暮らしから経済的利益が追求されるようになり、いかに現金収入を得られるかが鍵となっている。西部大開発構想の中にも、経済的利益の得られる作物の奨励がなされており、近年における野菜栽培の生産量の増加はその一つの流れであるだろう。

¹ 対象地域は重慶、四川、貴州、宁夏、雲南、チベット、陝西、甘肅、青海、新疆、新疆生産建設兵団、広西、内モンゴルであり、これらの地域以外に、湖南湘西土家族苗族自治州、吉林延辺朝鮮族自治州も西部大開発に関する優遇政策を受けられる。2000年末現在、西部地区の12省区市の面積は685万平方Km、全国の71%、人口は約3.6億人で、総人口の28%を占めている。

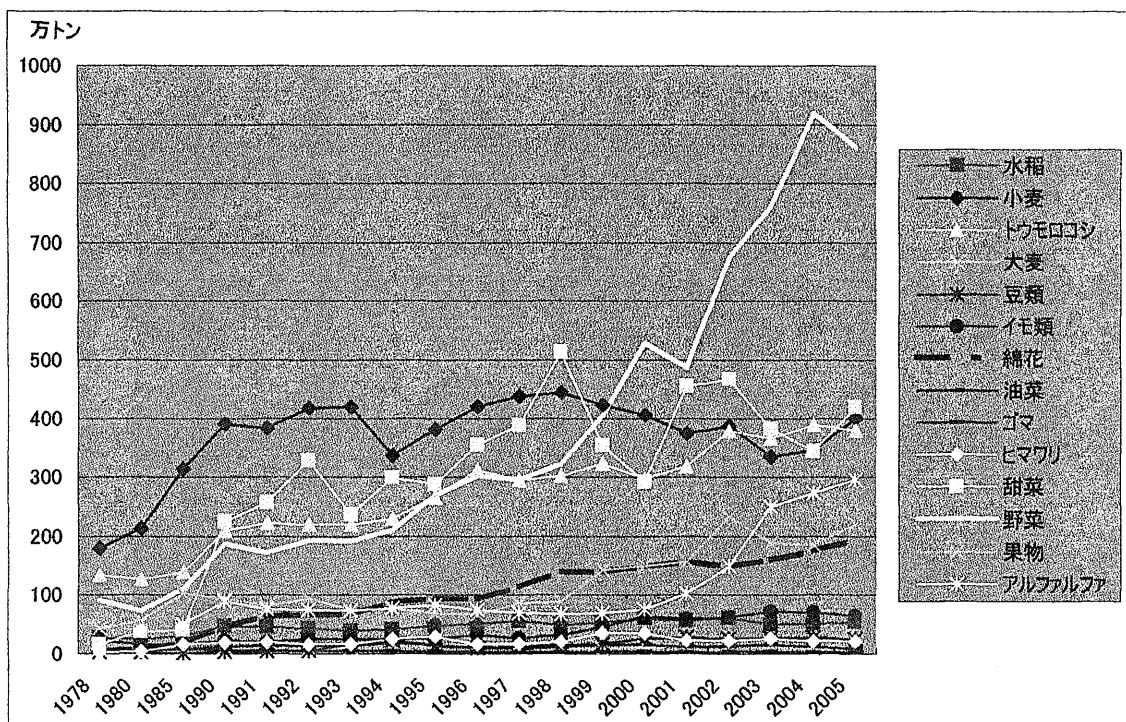


図1 年別農作物生産量の経年変化（「新疆統計年鑑 2006」， pp.305 より作成）

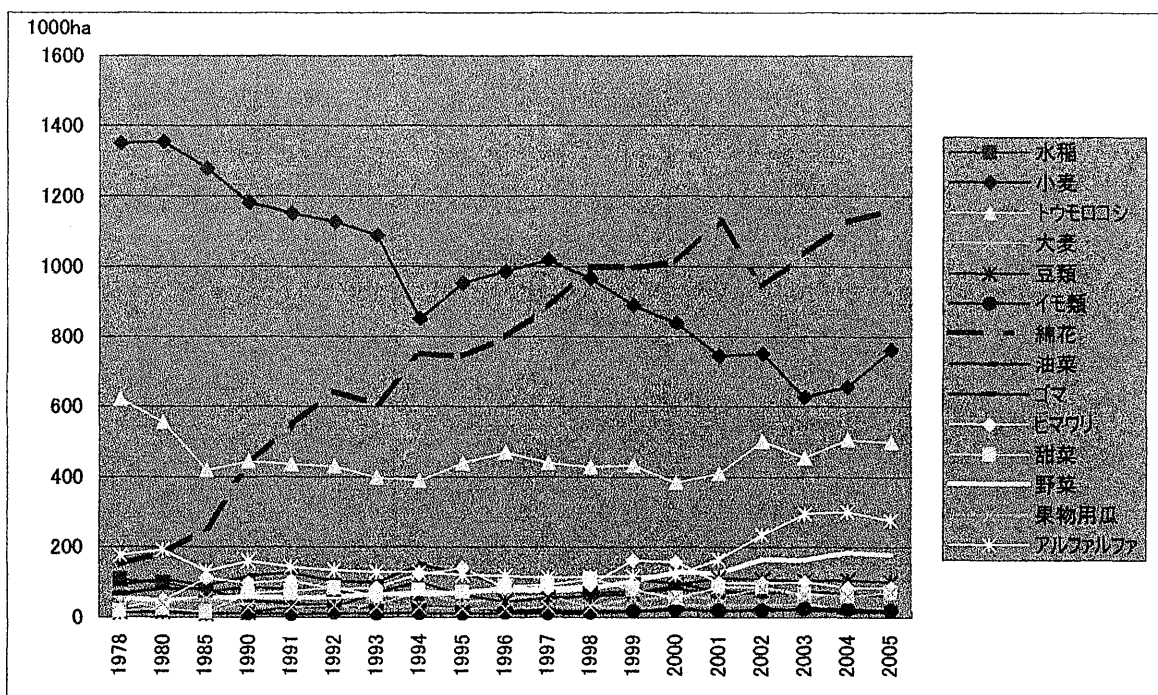


図2 年別農作物の播種面積の経年変化（「新疆統計年鑑 2006」 pp.299 より作成）

その野菜栽培が盛んな地域の一つとして昌吉回族自治州をあげることができる(図4)。そこで本報告では昌吉回族自治州の中のジムサル県における農業の事例をあげて、現在農村における現状についてみる。

昌吉回族自治州ジムサル県は自治州のほぼ中央に位置し、新疆ウイグル自治区の首府ウルムチからは西へ約165kmのところにある。南には平均海拔2500mの天山山脈が東西に連なり、北にはグルパンテュンギト沙漠を抱くジュンガル盆地が広がる(図5, 6)。「吉木萨尔县志」によると、南に連なる山地は牧畜に適しており、また山地と沙漠の間の沖積平野は、光、熱、水利、土質の条件が良く、農業に適している。気候も南北で異なり、山側では年平均降水量が350mmで平均気温は2°Cで、沙漠側では年平均降水量が120~140mm、平均気温は5~8°Cである。人口は約13.4万人(2005年現在)、少数民族の占める割合は約29%で、民族構成は漢族、回族、カザフ族、ウイグル族の順に多い。県内には5郷4鎮があり、本報告ではその中のA郷におけるウイグル人Bさんの農場を事例としてとりあげる。A郷はジムサル県の中心から西へ30kmほどの所に位置している。なお、今回得たデータは現在の日本へ留学中のBさんの弟Cさんからのヒヤリングの結果である。

1. Bさんの農場概況

現在44歳のBさんは1996年から農場経営を始めた。農場経営を始める前までは外モンゴルとの貿易の仕事を行っていた。A郷は母方の祖父母の住んでいたところで、耕作放棄された土地が多数あった。Bさんは村から放棄された土地の耕作権をやすく買いとり、祖母の持っていた土地と合わせて、現在おおよそ2000ムーの土地をもっている。敷地内には3つの自家井戸と広さ2ムーのため池があり、そこから生活用水と農業用水を得ている。経営する農場にはウイグル族、漢族、カザフ族の10家族がいつしよに暮らしており、ここで働いている。中には親戚関係の者もいるが、その他はA郷の村民である。農業従事者には一人一日30元の給料が支払われている。収穫期などの農繁期には臨時に人を雇ってくるという。作物は小麦、トウモロコシ、米、スイカ(瓜子用、食用の種)、トマト、ベニバナで、家畜はヒツジ(1000頭)、ウシ、ウマ、ラクダである。家畜はカザフ族が担当している。夏は天山山脈の放牧地に連れて行き、冬はふもとの囲いの中で飼育し、一部をウルムチの市場に売りに行く。また、敷地内には馬のソーセージを作る薫製小屋があり、加工も行っている。

耕作放棄された土地が多く存在するこの地域では、特に北部で土地の沙漠化が進行しており、Bさんが新たに購入した土地の一部は作物が十分に育たず、家畜の牧草などを育てるのが精一杯であった。沙漠化防止の植林が政府から奨励されるようになり、3年前からBさんの農場でも2000ムーのうち700ムーに植林をおこなうようになった。植林した内の85%が成功すれば、政府から一年単位で奨励金が出るという。去年その成果が出て10万円ほどの奨励金がでたという。Bさんの農場では植林をする際に砂ナツメを植えている。

1970年代後半から新疆では商品作物である綿花栽培が奨励され、Bさんの農場のあるA

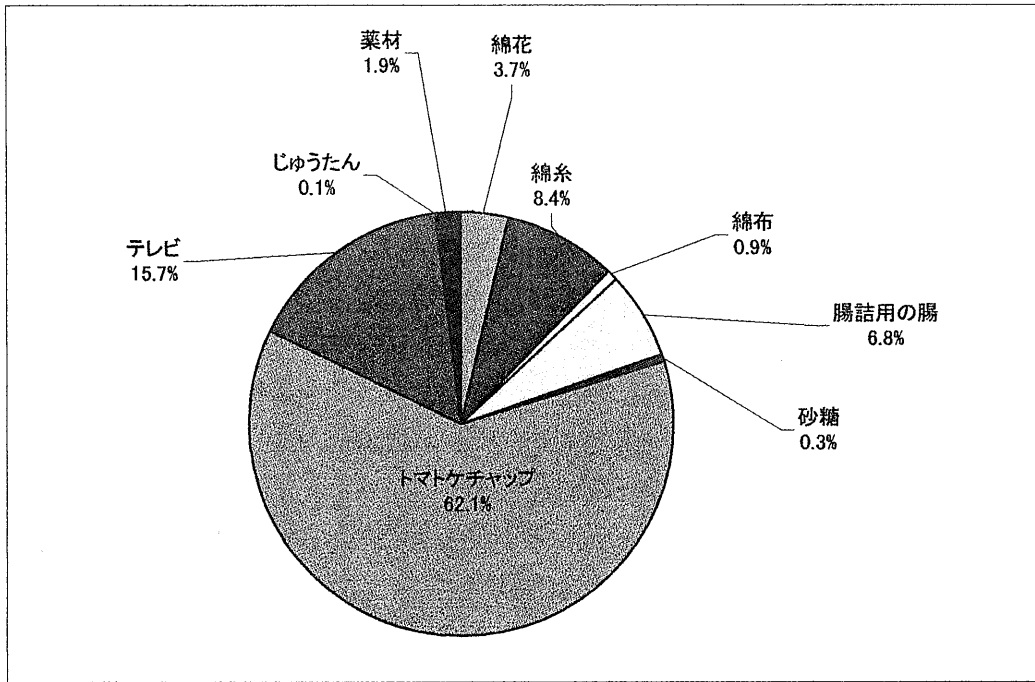


図3 新疆外への主な出荷品の金額割合（「年統計年鑑 2005」, pp.592 より作成）

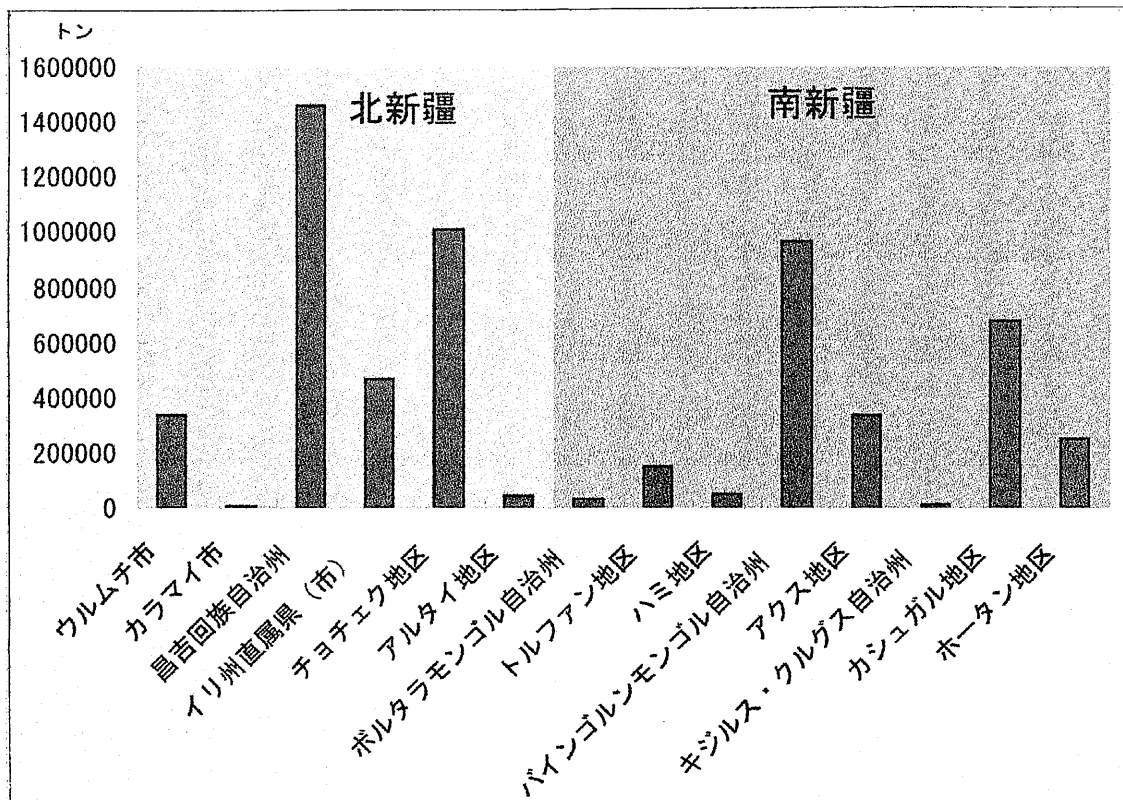


図4 地区別野菜の生産量（「新疆統計年鑑 2006」, pp. 306 より作成）

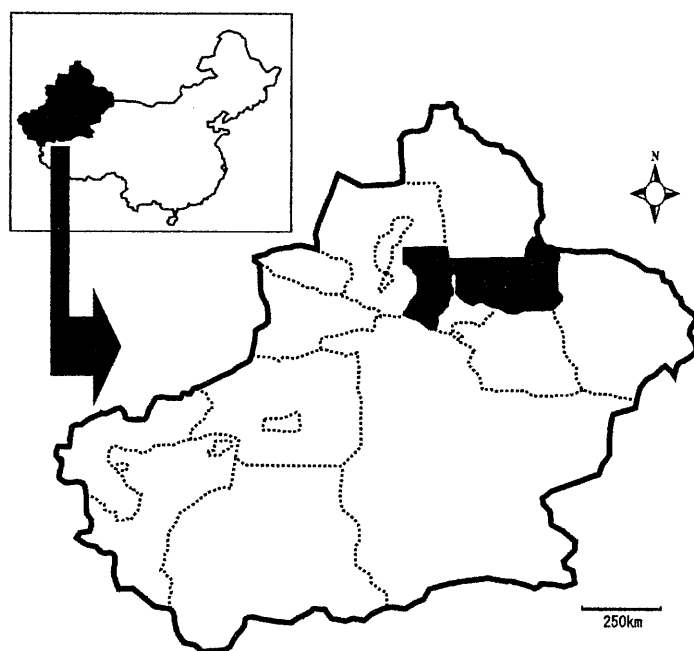


図5 新疆ウイグル自治区における昌吉回族自治州（黒く塗りつぶした所）の位置
 点線：自治区内の地区・市・自治州の境界線

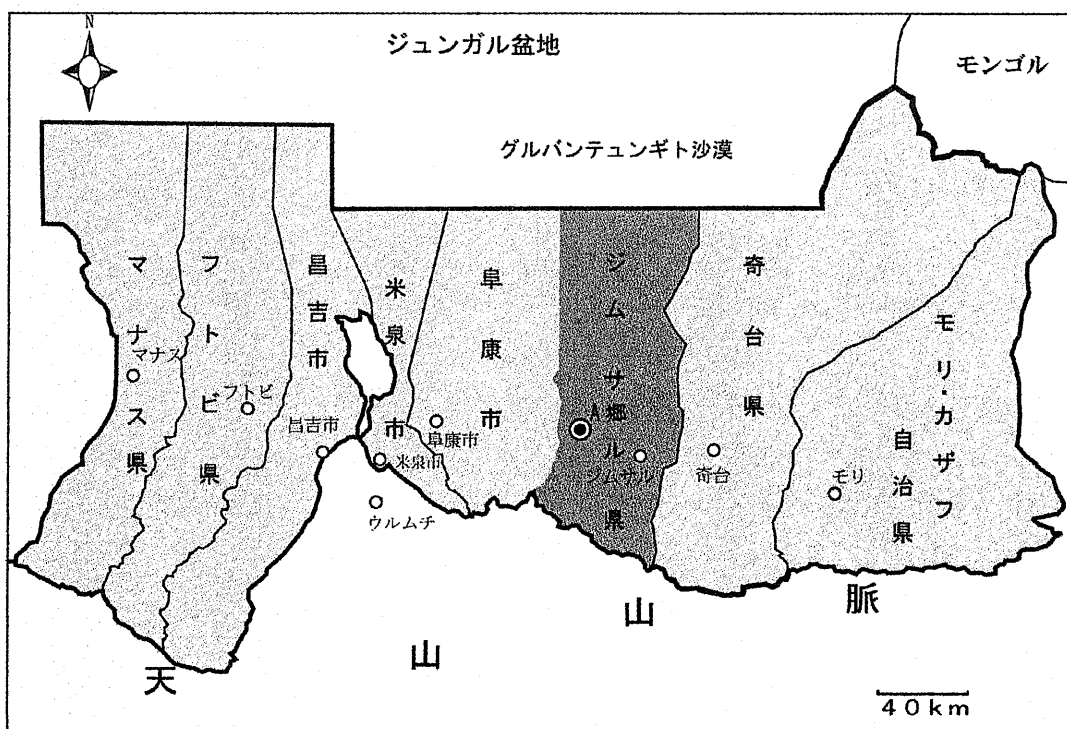


図6 昌吉回族自治州におけるジムサル県とA郷の位置

郷でも栽培が行われた。しかし、できた綿の実は小さくあまりよい収穫はえられなかったため、Bさんの農場では綿花は栽培していないという。

2. Bさんの農場経営

A郷には以前Bさん以外にも農場経営者が他に5人おり、Bさん以外はみな他の地域からやってきた漢族であった。そして現在も農場として経営を行っているのはBさんのところを含めて3軒だけである。1996年から農場をはじめて現在にいたるまでBさん農場が続いている理由について考えてみる。

Bさんの農場の収入はまず、農作物、家畜の売買と植林の奨励金、また、一部の土地を同村の農民に貸しており、その地代も収入となっている。また、自家井戸の水も農場以外の畑へ提供しており、その水代も得ている。農作物に関して言えば、トマトはケチャップ用であり、安定的な出荷先が確保されており、またベニバナは油として加工されるものもあれば、漢方薬の材料として高値で取引されているという。家畜は肉として売るのはもちろんのこと、馬肉ソーセージに加工することで付加価値があがり、さらなる収入の道が開かれている。また植林の成功によってもらえる政府からの奨励金も大きいだろう。

さらにBさん自身が生産物を買っているということも一つの要因であると考えられる。Bさんは農家の出身であるが、農業をずっと行っていたわけではなく、農場を始める前は貿易の仕事をしていた。農作物の流通は普通よそから買い取りにやってくる商人か、もしくは同じ村のある特定の村民が農作物を買い集めて業者に売るといった形である。そのため多くの農民達は市場ではいくらで取引されているのかという知識がほとんどなく、商人達の言い値でほとんど買いとられているという。しかしBさんは自ら車を運転して、ウルムチのバザールにまで売りに行く。貿易の仕事をしていただけあって商才があったといえるだろう。またA郷はウルムチという新疆で最も大きい都市、つまり消費地とそれほど離れておらず、道路も整備されている。日帰りできる距離に最大の消費地があり、立地的にも有利であったといえる。また、そうして市場に自ら参加し売ることによって、現在の傾向を知ることができる。それによってどんな作物が有利なのかを研究し、生産に反映させることができると考えられる。

3. おわりに

資本主義的な経済活動が広がる中で、それまでの食糧自給率をあげるための穀物の増産から、経済的な収入を得る道が模索されている。そうした中、Bさんの農場でも小麦、トウモロコシ、米などの穀物栽培を行うと同時に換金性の高い野菜の栽培を行っている。また農作物だけではなく牧畜による家畜の売買、肉の加工品を手がけることでさらなる付加価値をつけている。そしてみずから市場へと行き商品を流通させていることも、経済的な収入が得られる大きな要因であるといえる。

新疆全体から見ると、北新疆は南新疆と比べ、交通網が発達しており、首府のウルムチ

や工業都市が多く、農産品の後背地が近くに確保されている。つまり、農産品を消費する都市、農産品を加工する工場など、農産品の出荷先があり、比較的農業経営が安定して行える。商品作物の生産増加だけではなく、それと同時にそうした受け皿の確保が経済的に安定した農業を行う上で必要であり、また、市場での需要や傾向を知ることも重要であると考えられる。

引用文献

- 劉永志・吉野正敏 (1997) 「中国タクラマカン沙漠のオアシスにおける経済発展と土地荒廃」
沙漠研究, 7-1, pp. 13-22
- カマリディン (2003) 「新疆ウイグル自治区における持続的農業発展の可能性」 沙漠研究, 13-2, pp. 123-130
- 劉永志 (1998) 「中国新疆タクラマカン砂漠地域における資源・環境とオアシス経済—その地誌学的研究—」 愛知大学大学院文学研究科 博士論文
- 吉木萨尔县志编纂委员会 (2002) 「吉木萨尔县志」 新疆人民出版社
- 新疆维吾尔自治区统计局 (2004) 「新疆统计年鉴 2005」 中国统计出版社
- 新疆维吾尔自治区统计局 (2005) 「新疆统计年鉴 2006」 中国统计出版社
- 国家发展和改革委员会国土开发与地区经济研究所 编 (2003) 「中国西部开发信息百科・综合卷」 中国计划出版社